

「考え、議論する道徳」を成立させるための前提条件に関する研究

板橋孝幸

(奈良教育大学 学校教育講座 (教育学・教育史))

後藤篤

(奈良教育大学 学校教育講座 (教育学・教育史))

橋崎頼子

(奈良教育大学 学校教育講座 (教育課程・教育方法))

梶尾悠史

(奈良教育大学 社会科教育講座 (哲学・倫理学))

鈴木啓史・今井勇人

(奈良教育大学附属小学校)

A Study on the Precondition for the “Moral Education through Deliberation and Discussion”

Takayuki ITABASHI

(Department of School Education, Nara University of Education)

Atsushi GOTO

(Department of School Education, Nara University of Education)

Yoriko HASHIZAKI

(Department of School Education, Nara University of Education)

Yushi KAJIO

(Department of Social Studies Education, Nara University of Education)

Satoshi SUZUKI, Hayato IMAI

(Elementary School attached to Nara University of Education)

要旨:本稿は、「新学習指導要領に対応した道徳教育研究プロジェクト」(学長裁量経費)の研究報告である。当プロジェクトは、新学習指導要領に対応した道徳教育の内容と指導法を探求する目的から、次の3つの企画に携わった。①子ども理解とカリキュラム・マネジメントに関する実践報告会、②道徳の授業づくりに関する現職教員のための公開講座、③「子どもの哲学(P4C)を通して道徳教育を考える」ワークショップ。これらの取り組みを通して、子どもの事実を抛り所に学習を構成すること、多様な意見に触れて自己の考えの変容に気づいていくような教員自身の経験、学習者が発言しやすい場づくりによる学習者同士の関係性構築について検討した。

キーワード: 特別の教科 道徳 moral education as a special subject

カリキュラム・マネジメント curriculum management

モラルジレンマ moral dilemma

子どもの哲学 Philosophy for Children (P4C)

1. はじめに

「特別の教科 道徳」は、2018年度から小学校で、2019年度から中学校で全面実施となった。そこで本プロジェクトは、新学習指導要領に対応した道徳教育の内容と指導法に取り組むため、学長裁量経費の採択を受けて次の3プログラムを展開した。

1つ目は、子ども理解とカリキュラム・マネジメントに関する実践報告会の参加を通して、道徳教育をはじめとした教育実践に関する全国的な情報収集である。2つ

目は、平成31年(令和元年)度からの中学校「特別の教科 道徳」(道徳科)の実施に伴い、学部教職科目・大学院実践的科目における道徳教育の内容と指導法の研究を踏まえ、道徳の授業づくりに関する現職教員のための公開講座に取り組んだ。3つ目は、学部教職科目・大学院実践的科目のあり方を考えるため、「子どもの哲学」(Philosophy for Children, P4C)を事例とした検討である。

「特別の教科 道徳」では、「考え、議論する道徳」の実施が叫ばれている。しかし、そうした道徳教育を実践するためには丁寧な前提となる環境づくりなしに成立し

得ない。そこで本研究では、上記3つのプログラムを通して「考え、議論する道徳」を成立させるための前提条件を探ることを目的とする。

〔板橋〕

2. 宮城教育大学における「教育実践を確かめる会」

2.1. 開催の経緯と当日の内容

近畿ESDコンソーシアム(2018年12月26日、27日)に参加していた宮城教育大学附属小学校(当時)の佐竹達郎教諭から、東北地方を中心とした教育実践研究会を立ち上げたいという相談を受けて、開催に向けての準備をサポートした。

このような経緯から、2019年4月28日、29日に宮城教育大学で「教育実践を確かめる会」を開催するに至った。本学からは、本プロジェクトのメンバー(板橋・後藤・鈴木・今井)に加え、附属小学校の多田桃子教諭に参加していただいた。他にも、宮城教育大学の本田伊克准教授、吉村敏之教授、岩手大学の土屋直人准教授にご参加いただいた。2日間の開催で、参加者は約40名であった。

当日は、グループ・ディダクティカ編『深い学びを紡ぎ出す一教科と子どもの視点から』(勁草書房、2019)の第14章を執筆した滋賀県の小学校教諭・石垣雅也氏から、章のタイトルでもある「子ども理解から始まるカリキュラム・マネジメント」と題した基調報告があった。その後の実践報告では、宮城県・岩手県から4本(道徳科・体育科・社会科・防災教育)に加え、本プロジェクトメンバーである今井が小学校1年算数科の実践報告を担当した。

石垣氏の基調報告では、子ども一人ひとりのつまずきを評価テストのみならず、日常の学習のなかに見出そうとする実践事例が紹介された。そのうえで、このような「子ども理解から始まるカリキュラム・マネジメント」こそが、教師の専門性を担保するものであるという課題提起が示された。参加者からは「子どもの真実を知る、子どもの本音を知ることから始まるのかなと考えました。自身がどんな存在となっていくかを考えさせられたお話でした」という感想が寄せられた。

教師は子どもの事実を知ろうとすることを通して、自らを知っていく。このような実践的視座を大事にしながら「教育実践を確かめる会」での議論は進められていった。

〔後藤〕

2.2. 子どもの事実を通じて—参加者の感想から

各々の実践報告が終わった後には、上記の基調報告に即して活発な議論が進められた。この点に関連する参加者の感想を一部抜粋しておく。

自分の毎日を振り返って、子どもが何か「できないと

き」「つまずいたとき」「トラブルがあったとき」に、子どもと向き合っていたのだろうかと考えました。

自分の教員としての考え方を振り返ろうと思いました。学級経営をはじめ、もっと自分自身のことを批判的に見直すことも必要だと感じました。

どの実践も子どもの具体的な事実、姿で語られているところが素晴らしく、勉強になりました。日頃からそうした目で先生方が子どもたちを見ている証拠なのだと思います。自分の子どもの見方、授業の考え方、このままでいいのかと考えさせられました。

授業実践をつくっていく中で、教科の科学性、またその系統性というものは改めて大切にしたいと思っています。しかし、その「ねがい」を「おしつけ」に変えないためには、子どもの要求というのを発達といった大きな集団の視点と目の前の一人一人の姿といった個別の視点から、絶えず考えていく必要があると思いました。

上記の感想から参加者たちは、実践報告に現れた子どもの事実を通して、自らの授業観や子ども理解を問い直していたことがわかる。また、教師の権力性—教師の「ねがい」が時に「おしつけ」になること—を認めつつ、教育実践を進めることの重要性、教師は自身の「ねがい」の正当性をどこに見出すことができるのか、といった点について考察が進められていたことがうかがえる。以上から、多くの参加者にとって「教育実践を確かめる会」は教育実践の記録を綴ること、聴き合うこと、それを通して自分と向き合うということの意義を再確認する機会になったといえよう。

基調報告を担当した石垣氏は、報告者たちによる参加記のなかで「教育実践とはその教師がその教師として生み出していくものである」と記している。自らを教師として引き受け、実践を進めていくための拠り所をどこに見出すべきかについて、議論を重ねた2日間であった。

新学習指導要領における道徳科にあたっては「考え、議論する道徳」の方法や、評価の問題に議論が焦点化される。無論そのこと自体を否定するつもりはないが一方で、子どもの事実を知るとはどういうことか、教師は何を拠り所にして、子どもの学習を構成していくのかについても問い続けておく必要がある。「子ども理解から始まるカリキュラム・マネジメント」は、そのような意味で道徳科の授業構想の手がかりとなるに違いない。

〔後藤・鈴木・今井〕

3. 道徳の授業づくりに関する現職教員のための公開講座

3.1. 公開講座の概要と受講者の振り返り

2019年12月25日(水)・26日(木)に、奈良教育大学と五條市教育委員会の共催による「現職教員のための公開講座」が五條市牧野公民館で行われた。本プロジェクトメンバーの梶尾・後藤・板橋の3名は、26日(木)10時30分から12時の90分間で「道徳の授業づくりについて考えよう」と題した講座を担当した。受講者は小学校教員8名、中学校教員2名、五條市教育委員会から2名で、教員経験年数も3年目から33年目と幅広く、多様な問題意識を持った教員の参加があった。

この公開講座は、日頃の道徳授業の課題、不安、悩みごとを持ち寄り、教科書教材を使った考え、議論する道徳の授業づくりについて深めることを目的として実施した。昨年度実施後に取ったアンケートで、参加者同士の抱えている課題や悩みを共有して改善するための方途を話し合う時間がもう少しほしかったといった意見があった。さらに、五條市教育委員会から事前に「道徳の授業づくりで、教科書を使って子どもが主体的に考え、議論する道徳について学びたい」との講座内容に対する要望も寄せられた。今年度は、この2点を踏まえて内容を計画した。

まず、①教科書教材を使った「考え、議論する道徳」の授業づくりをどのようにしているか、②どのような日頃の道徳授業の課題、不安、悩みごとがあるか、この2点についてグループにわかれて話しあい、出された意見を整理した。次に、グループで話し合った内容を全体に報告してもらい、出された意見について具体的な事例を用いて講義を行った。最後に、「考え、議論する道徳をするにはどうしたらいいか」について考え、意見交換した内容を発表してもらった。

講座を実施するにあたって、講座前と講座後の道徳教育に対する認識の変化をつかむため、振り返りシートを用意した。講座前には、①講座の受講動機は何ですか、②道徳教育についてどのようなイメージを持っていますかの2つについてたずねた。

①の受講動機については、「教科書を使い、必修化された道徳について、本校の道徳教育推進教員とも相談しながら授業を本年度も進めているが、『教えこみでない』道徳、『多様な意見が出る』道徳を目指しているが、それらには程遠く、最終的に『教え込み』のようなものとなってしまい反省している。この状況を打開する『アイデア』を見つけるために受講した」といった意見が散見された。道徳の教科化に伴い、子どもが主体的に考え、議論する道徳を行いたいと思っているが、どうしたらいいかといった課題を持って講座に参加している様子がうかがえる。

②の道徳教育のイメージについては、「私が義務教育

段階で受けてきた道徳は、教えこみに近く、また教科書(当時は副読本)を使わず、授業をしてきたイメージがある」といった回答が見受けられた。自分が受けてきた道徳教育と重ねながら、新たに教科書を使うことになって悩んでいることが読み取れる。全体的には、講座前に多くの受講者が「道徳の中心発問とそれに向かう発問が一問一答とならないためにどうするか」といった悩みを抱えていた。そうした発問をすることによって、「価値観の押しつけになってしまいがち」といった課題に気づいている。しかし、なかなか本音で語れる授業の組み立て方にならないため、この講座で学びたいという受講動機だったと整理できる。

講座後には、①「考え、議論する道徳」をするにはどのようにしたらいいと考えましたか、②本講座を受講して、どのようなことが学べましたか、③感想等もお書きくださいの3つについてたずねた。こうした受講後の質問項目に関する振り返りシートから、本講座を通して受講者たちは大きく3つの気づきがあったと読み取れる。

1つは、「『相手の考えや思い』を知ることが大事で、自分ごとにする」ためには、自分ならどうするかと具体的に思考させることが必要といった意見である。そのためには、「行動と意識の両方を考える。行動でも意識でも相反する意見についてどうしてそう考えるのかについて議論する」といったモラルジレンマを取り入れた授業をすることで、「考え、議論する道徳」へとつなげようとする工夫が出された。「わかっているけどやれないのは、本当の意味で納得していないというのが印象的でした」といった意見もあり、講義の内容を踏まえて自分ごとにすることが納得につながっていくと理解を深めたようであった。

2つ目は、自分ごとにするための具体的な授業方法についてである。「黒板などに可視化して、自分の考えや相手の考えの位置を確認するような工夫が必要だと考えた。また、その考えについて、『どうしてそのように考えたのか』を聞き取り、それらも可視化することで、全体で議論していけるのではないかと考えた」といった意見に見られるように、子どもたちの考えを可視化することが、「考え、議論する道徳」を作っていく上で必要であると学んだことがわかる。さらに、「授業を受ける前の自分の考えはどのようなだったか、途中経過でどのようなになったか、授業を受けた後の自分の考えはどう変化したかが常に目で確認できるようにするというのは非常に大きいと思った」といった授業前と授業後の変容を児童・生徒自身が認識できるようにする可視化の工夫も取り上げられた。

3つ目は、「できるだけ生徒から様々な意見を引き出せるよう、日頃から発言をしやすい学級作りも必要ではないかと思う」といった道徳の授業外での工夫である。道徳の授業内だけで行えることには限りがあるので、普段の学級経営から考えていく必要があるといった気づき

といえる。

こうした振り返りシートの記述から、「考え、議論する道徳」の授業をする1つの工夫として、モラルジレンマの授業を取り入れることで、教材を自分に引きつけて考える姿勢を作り、みんなで話し合っ出された意見を可視化していくことで多様な意見に触れて、自己の考えの変容に気づいていくような展開を考えることができたと読み取れる。

〔板橋〕

3.2. 「考え、議論する道徳」のための授業提案

「特別の教科 道徳」の実施に伴い、今、「考え、議論する道徳」への転換が求められている。だが、思考や議論を重視するねらいはどこにあるのか。また、その目的に適う効果的な方法として、どのような授業展開が考えられるか。公開講座では、これらのテーマについて15分程度の時間を充てて見解を述べた。概要は以下の通りである。

道徳教育の歴史を振り返ると、主にアメリカの教育界を中心に、コンテンツモデルからプロセスモデルへの転換という大きな動きを見て取ることができる。つまり、価値項目（内容）の教え込みを主とするものから、子どもによる価値の探求（過程）を中心に置くものへと、道徳教育のあり方が様変わりしてきている。日本の道徳教育に求められる質的転換も、大枠において、この流れに棹差すものと言えよう。『学習指導要領解説』では、「答えが一つではない道徳的な課題を一人一人の生徒が自分自身の問題と捉え、向き合う」ことが「考え、議論する道徳」の特徴として述べられ、こうした教育への「転換」が謳われている⁽¹⁾。

以上が、言語活動を教育の中心に据えることのおおよその意義である。思考や議論は価値の探求を目的とした活動だと言える。次に、この目的から「考え、議論する道徳」を効果的に展開するためにどのような方法が考えられるか、特に教科書を用いてどのような授業づくりが可能であるか、見ていく。まず押さえておくべきことは、一般に、思考や議論は何らかの問題を解決に導くための手続きとして展開されるということである。したがって、道徳の授業では、これらの活動を誘発するきっかけとして「問い」を子どもの中で共有する必要がある。ここで思考・議論は、困難な倫理的課題に直面するときを開始し、課題解決の指針となるような価値や規範の了解において一応の決着を見る、一連のプロセスであり、いわば「謎解き」という性格を有する。

公開講座では、問いの具体例として「モラルジレンマ」を紹介し、その効果について検討した。「命の選択」（『中学道徳3』光村図書）という教科書教材では、祖父の延命措置をめぐって「人命を尊重すべき」か「個人の意志を尊重すべき」か、という2つの価値（道徳規範）の対立が追体験される。モラルジレンマ授業では、こうし

た葛藤を起点に、「判断・理由づけカード」と呼ばれるワークシートを用いて議論が行われる（表1）。

表1. 判断・理由づけカード

問. 祖父に人工呼吸器をつけるべきか？ それはなぜか？	
つけるべき	つけるべきでない
そう考えた理由は？	

（筆者作成）

もちろんすべての倫理的課題がモラルジレンマの形をとっているわけではない。だが、モラルジレンマに取り組むことには特別な意義がある。このことを理解する手掛かりは、コールバーグの認知発達理論の中にある⁽²⁾。彼は道徳性を認知能力の一種と捉え、道徳性の発達を認知能力の発達として説明した。先の教科書教材を例にとれば、子どもは生命と人格という2つの大切なもののいずれに定位することもできない不均衡状態に置かれるが、やがて1つの価値に向けて認知的シエマを調節するに至る。コールバーグによれば、道徳性の発達はこのような調節の過程を通してなされるという。この考えに立ち、モラルジレンマ授業では、調節と均衡化の過程が「理由づけ」の討議によって相互主観的に促進されることが期待される。また、行動原理（価値）を自ら理由づけながら納得感をもって自己立法できる、自律的な判断主体の育成が目指される。

ただし、子どもの合理性に全幅の信頼を寄せる、こうした授業には、いくつか懸念材料がある。まず、読み物資料に多い創作物を題材とした場合、どうしても現実の経験から乖離してしまいがちである。また、その結果、授業で企図される価値探求は、実質において「道徳パズルの答え探し」という程度のものに矮小化される恐れがある。

そこで、子どもの経験と価値とを結びつける工夫として、プロセスモデルのもう1つの潮流をなす「価値明確化」授業を紹介した。これは1960年代にラスを中心とする教育者グループによって提唱された実践であり、価値とは経験の流れの中で自ずと形成されるものだとする自然主義の思想がその根底にある⁽³⁾。また、「…は価値がある」という価値判断は「…は喜ばしい」などの主観的感情によって基礎づけられると考える点で、倫理的な主観主義の一形態とも言える。価値明確化を取り入れた授業では、「考え、議論する」プロセスは合理的な探求というよりも、生活の振り返りや感情の内省という意味合いを強くする。たとえば、「友達」について抱く感情をありのままに見つめ、また、その感情がどのような生活場面と結びついて醸成されたかを反省する（表2）⁽⁴⁾。

こうした取り組みを通して、子どもは自分の価値観を改めて自覚し、よりいっそう強固なものにしていく。

表2. 価値のシート

下の文は、よい友達に気がかけている人に対して行うであろうと思われることです。この中で友達があなたにしてくれたらうれしいと思うことを5つ選びましょう。選び終わったらグループで話し合ってみましょう。

- | |
|---|
| (ア) 病気の時に電話をしてくれる。
(イ) 学校を休んだときにノートをとってくれる。
(ウ) ものを貸してくれる。
(エ) 悩み事があるとき辛抱強く聞いてくれる。
(オ) 私の機嫌や、嫌な態度を許してくれる。
…… |
|---|

(出典：尾高 2006)

価値明確化を目的としてなされる反省・対話は、価値と生活とを橋渡しする効果があり、したがって合理的探求モデルの思考・議論を補完することが期待できる。

モラルジレンマを中心に行った以上の提案に対して、参加者から「教科書を使って議論に繋げるのは難しい」という声があった。これに対しては、1つの内容項目に収斂するように見える教材でも、中断読みなどの工夫によってモラルジレンマ課題を顕在化させることが可能であることを、定番教材の1つである「ブランコ乗りとピエロ」を例に説明した。道徳の教科書は既成の教材ではなく、むしろ応用可能な素材とみなすのが適切である。そして、素材の応用可能性をさまざまな角度から検討することが、道徳科の授業研究においては重要になる。

[梶尾]

3.3. 得られた成果

受講者からは、本公開講座に満足した、勉強になったとの回答がほとんどだった。「受講後の振り返りシートを見ると、本講座内容のグループワークで話し合ったことが、『考え、議論する道徳』ことなのだと感じました」といった回答が多くあった。話し合いの時間を多く取った今年度の講座内容は、教員自身が考えていることをみんなでも出し合う大切さについて再認識する場ともなったようである。教科化による教科書使用で、子どもたちの実態に合わせて教材選びをするにはどうしたらいいかという悩みは大きく、他の出版社の教科書を活用してみる方法もあるといった本講座での提案は、簡便に実施できる方法として理解されたようであった。その一方で、講義の時間をもう少し長く取ってほしい、評価についてももっと聞きたかった、優れた実践を見たいといった要望も出された。次年度以降の内容作りに向けて、課題としたい。

[板橋]

4. 「子どもの哲学 (P4C) を通して道徳教育を考える」ワークショップ

4.1. P4C ワークショップについて

「特別の教科 道徳」では、「考え、議論する道徳」に対する取り組みが求められている。この考え議論する前提として、対話の重要性が指摘されている。荒木は、対話は、信頼に満ちた関係性と、そこでの傾聴を含むものであるという⁽⁵⁾。ここでの傾聴とは、単に相手の話を理解するだけでなく、話の背後に隠された相手の意図に気づこうとする態度である。そのような相手の言葉を受け入れようとする態度が、相手の存在をすべて受け入れることにつながり、そこに関係性が成立するという。

P4Cを中学校の道徳教育の実践の中に取り入れている若森は、学習者への聞き取りの中で、「何となく良いこと言わなくちゃいけない空気がある」という発言があったことに着目し、「『良いことを言わなくてはならない空気』というものをどのようにして克服していくかが課題であるということ」を授業者と学習者は確認し合った。その背景には承認欲求や、自尊感情低下の問題が存在するのではないかと述べている⁽⁶⁾。

このような議論の前提にある関係性づくりとしての対話や、学習者が発言しやすい場づくりを促す方法として、ここでは「子どもの哲学」(Philosophy for Children, 以下 P4C) に注目した。P4Cを道徳教育と関連付けて論じる河野は、道徳的問題を個人の心情に還元することを批判し、民主的な社会構築に参加する市民の育成をその中心に据えることを主張する⁽⁷⁾。民主的な話し合いのためには、多様な人々が互いの意見に耳を傾け、意見が対立しても安心して意見が言えること(ケア的思考)が重要で、それに加えて一人ひとりが当たり前を疑い自分で考え、意見を述べること(批判的思考)、多様な意見を聞く中で新しい考え方ができるようになることを経験すること(創造的思考)が必要であるという。

P4Cについては、これまで学部教職科目「道徳教育の理論と実践(中等)」の中で、理論的な側面について講義を行ったり、先行事例のビデオを見せたりする形で紹介を行ってきた。しかし、学生がこれまで経験してきた道徳教育と必ずしも一致しない場合もあり、イメージしにくい様子がみられた。そのため、本プロジェクトにおいて2018年度より2年連続して、P4Cを学生が体験するワークショップを開催してきた。本年度は2年目になる。

2019年12月14日(土)に、「子どもの哲学を通して道徳教育を考える」というテーマでワークショップを開催した。このワークショップは、学部教職科目「道徳教育の理論と実践(中等)」の授業の一部として位置づけたものであったが、初等の授業でも参加者を募集した。参加者は、学生48名、本学教員3名、本学附属小学

校教諭1名であった。外部講師として、関西圏の小学校等でP4Cを実践され、P4C Japanという民間の研究會に所属されている5名の方々をお招きした。ワークショップでは、P4Cの理念や実践の要点に関する説明を頂いた後、9名1グループで5つのグループに分かれてP4Cの体験（1時間程度）を行った。その後、全体で振り返りと質疑応答（30分程度）を行った。終了後に参加者全員に、ワークショップの感想についてアンケートへの記述を求めた。

ワークショップでは、今年度は、参加者が問いを作ることから取り組んだ。グループごとに方法は異なっており、道徳の教科書を読んだ上で問いを作る、日常の経験から問いを作る、教育についてというテーマのもとに問いを作るなど様々であった。円型に置かれた椅子に座り、輪を作って互いの顔を見ながら、発言したい人がボールをもって発言し、次に発言を希望する人にボールを回し、議論を積み重ねていく中でテーマについて考えを深める活動を行った。さらにまとめとして講師からは、自分の学級でのP4Cの実践や子どもの反応についても紹介があった。

4.2. 得られた成果

ワークショップを受講した学生の感想文からは、P4Cの特にケアの思考、互いに聴きあう環境づくりについての学びがみられた。感想の抜粋を掲載する。

ある学生は、「何気ないことでも気軽に話せる空気感でよかったと思った。道徳の授業は少し堅苦しい授業のように感じていたが、発問内容も特に難しいものでなくてもよいとわかり、こどもたち自身が自分のことを考える内容にすることが大切であると思った。また、ボールを回して自分の意見を話す機会が適度にあり、話すことが苦手な子どもであっても話しやすい環境を道徳の授業の中で作ることができるとわかった」と述べ、話すことが苦手であっても、何気ない話題から自分のことを安心して話すことのできる環境づくりについて触れている。またほかの学生は、「初めて道徳の授業が楽しいと感じた。今までの授業とは違い、みんなで考え、様々な意見を取り入れることができた。また自分の伝えたいことを、ゆっくりと時間をかけて考えることができ、きちんと言葉にすることができたのでよかった。」と述べ、時間をかけて自分の言葉で話したり、他の人と考えあうことの楽しさに触れている。

このような安心できる環境の中での関係性をもとにした対話は、批判的思考や創造的思考にもつながったようである。例えばある参加者は、「みんなで」や「絶対」という過度な一般化や偏見に気づかされた」と述べている。また、他の参加者は、「話が一つのものにとどまらず、自分の話からまた様々な話に展開していった。そこから新しい疑問に発展していくことで、自分の中にある考え、思いがどんどん深まっていった。」と述べている。

今後は、以上のことをふまえ、考え議論する道徳教育

の前提としての学習者同士の関係性、学習の場づくりといった点についてさらに実践的に考察を深めたい。

〔橋崎〕

5. おわりに

本プロジェクトでは、①子ども理解とカリキュラム・マネジメントに関する実践報告会、②道徳の授業づくりに関する現職教員のための公開講座、③「子どもの哲学（P4C）を通して道徳教育を考える」ワークショップの3つに取り組んだ。完全実施となった「特別の教科 道徳」では、「考え、議論する道徳」の取り組みが求められているが、そうした道徳教育を実践するためには丁寧な前提となる環境づくりが必要である。本研究では、上記3つのプログラムを通して「考え、議論する道徳」を成立させるための前提条件として、子どもの事実を投げ所に学習を構成すること、多様な意見に触れて自己の考えの変容に気づいていくような教員自身の経験、学習者が発言しやすい場づくりによる学習者同士の関係性構築について検討した。なお、4つ目のプログラムとして3月5日（木）に附属中学校において公開研修講座「ESDの理念を含んだ道徳科授業の実践」を計画していたが、新型コロナウイルスの影響で校内に限定した形での実施となった。

〔板橋〕

注

- (1) 文部科学省『中学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編』教育出版、2018年、2頁。
- (2) Cf. L. Kohlberg, "From Is to Ought: How to Commit the Naturalistic Fallacy and Get Away with It in the Study of Moral Development." in T. Mischel (ed.), *Cognitive Development and Epistemology* (New York: Academic Press, 1971).
- (3) Cf. L. E. Raths, M. Harmin and S. B. Simon, *Values and Teaching, Working with Values in the Classroom* (Columbus: Charles E. Merrill Publishing Company, 1966).
- (4) 尾高正浩『「価値明確化」の授業実践』明治図書、2006年、32頁。
- (5) 荒木寿友「シティズンシップ育成における対話と自己肯定感—「特別の教科 道徳」と国際理解教育の相違を手がかりに—」『国際理解教育』vol.22、67-68頁。
- (6) 若森達哉、橋崎頼子、森本弘一、竹村景生、中村基一、尾本潤治、中嶋たや「学習者の実態に沿った「特別の教科道徳」の教材開発・実践(2) —対話を行う場の設定—」『次世代教員養成センター研究紀要』(6)、2020年、220頁。
- (7) 河野哲也『道徳を問いなおす：リベラリズムと教育のゆくえ』ちくま新書、2011年、26-28頁。